

直接性としての直観 —古代・中世哲学における〈直観〉の諸相—

田 中 綾 乃*

〈はじめに〉

「チョッカン」という言葉を聞いたとき、我々はそれをどのようなものとするであろうか。おそらく、現在では、「直接感じる」という意味で「直感」を連想する場合が多いのではないだろうか。直接感じる「直感」と言われれば、一般的な意味で、我々にとっても理解できるものであると思われる。しかしながら、哲学において、伝統的に、「チョッカン」は「直観」である。カントの哲学書の中で「チョッカン」を「直感」としてしまっては、まったく意味が違ってきてしまう。それほど「直感」と「直観」は違うのである。それではどのように違うのであろうか。

日本語において、「チョッカン」は明治時代の新語で、intuition（独：Intuition）の訳語である。ここでは、まず日本語の「チョッカン」の成立を見ることにより、日本語における「チョッカン」の意味内容を考察してみることにする^(*)。

明治14年刊の西周の『哲学字彙』には「intuitive knowledge」を「直覚智識」，「intuitive notion」を「直覚総念」と訳しており、英語の intuition，同じくドイツ語の Intuition の訳語として「直覚」という語をあてたということが窺える。西周は、『五原新範』第四章（明治3～6）の中では、次のように記している。

* 横浜市立大学大学院 国際文化研究科
人間科学研究分野博士後期課程在籍

「はるのくさを見て、……かぎてしり、あちはひてしり、おほへては、いたしとしり、つめたしとしるのたぐひは、これをなづけて、直覚、または無媒諦となづけて…」

ここでは、主に我々が感覚で知るようなものを「直覚または無媒諦となづけて」とあり、この「直覚」は西の造語とみられている。

さらに、明治38年の『普通術語辞彙』では「直覚」を次のように定義している。

「直覚と云ふ語は、従来哲学美学倫理学心理学上様々の意義に用ひられてゐる〈中略〉一言を以て謂へば、直下又は直接の知覚、判断、了解、認識、並に之等の心意作用の結果を、共に直覚と謂ふ」

西の引用、またこの辞彙からもわかるように、「直覚」すなわち intuition は何かを知ること、しかも〈直接に〉知るまたは感じることであるということがわかる。同じく『普通術語辞彙』では、英語 intuition、ドイツ語 Anschauung の訳語として「直観」(*2)も載せている。

「直観は直覚の別語で、其の意義する処は無論同一である。〈中略〉観と謂へば、洞見達観と謂ふが如き知識を連想せしめ、覚と謂へば、単に感じ知ると謂ふ意味を連想せしむ。従って直覚と謂へば児童、大学者、詩人、美術家を問はず、平等に用ひて何等の感触もないが、直観と謂ふ文字を幼稚なるものに用ゆれば、語意相添はざるの感がある、〈中略〉直観と謂ふ語は多く知識と謂ふことに重きを置いて、以て直覚の意義に用ひてゐる。」

この「直観」の記述には非常に興味深い点が見られる。それは日本語の意味説明といってもいいのだが、〈中略〉のすぐ後に、「観と謂へば、洞見達観と謂ふが如き知識を連想せしめ、覚と謂へば、単に感じ知ると謂ふ意味を連想せしむ」とある。いわば「観」と「覚」の意味の差異を示しているのであるが、このことは「直観」といえば、それが何か知識

のようなものを「直観」するのであり、「直覚」は何かを感じとること、つまり「直感」を意味しているといえよう。

明治時代、Intuition を「直覚」とも「直観」とも訳したのは当然のことながら Intuition に両方の意味があるからであろう。しかしどちらも重要なのは、日本語の「直」が示しているように、直接に感じ、また直接に観る^{(*)3}ということであることをまずもっておさえておきたい。そしてそれを前提にした上で、ここでは、単に感じ知る「直感」ではなく、何か知識を連想させるような意味あいをもつ「直観」に焦点をあて、哲学における「直観」を考察することにする。

しかしながら、一言に、哲学における直観と言っても、それはとても錯綜しているように思われる。というのも、時代や哲学者において、その使い方や位置づけは実に様々であるからである。

たとえば、18世紀の哲学者カントは、『純粋理性批判』(1781/1787年)において、「我々に可能な直観はすべて感性的なものである」(B146)と述べ、「感性的直観 (sinnliche Anschauung)」を確立する。しかしながら、このようなカントの主張は、その当時ほとんど理解されえぬものであった。同時代のヘルダーは、『理性と言語—「純粋理性批判」へのメタクリティーク』(1799年)の中でカントにおける直観の使用法が伝統から外れたものとして批判している^{(*)4}。

伝統的には直観は「知的直観 (intellectual intuition/intellektuelle Anschauung)」と言われるような高次の認識能力である「知性」の特性として考えられていた。したがって、このような伝統にしたがえば、カントの直観は、高次の「知性」から低次の「感性」へといわば退化したものであるとして理解され、それが批判的になるのである。

確かに、古代においては *noûs* の中に直観の能力が見出され、中世においては神学と結びついた「知的直観」という概念が定着し、直観は、

アイデアや超越的なものを認識する能力として高次の側面をもっている。そうだとすれば、カントの「感性的直観」は伝統破壊となるのであろうか。このことを探るため、ここでは古代から中世にみられる直観の変遷を追うことにする。それぞれの哲学者における直観の用い方を見比べることで「直観」とは何であるのかを考察することを目的とする。

I プロティノスの〈エピボレー〉

Intuition のラテン語は 〈intuitus〉 である。では、ギリシャ語では「直観」は何であるのだろうか。Th. Kobusch や El. Stroker によれば、直観のギリシャ語は 〈ἐπιβολή〉 にあたる(*5)。

〈intuitus〉という語を最初に使用し、これを定着させたのは、5 C 末、最後のローマ人であり、また最初のスコラ学者であるボエティウスだと考えられている。彼はプラトン、アリストテレスの全著作を翻訳し、また註解書も多く、古代から中世へのかけ橋として重要な役割を担ったが、〈intuitus〉もこの時 〈ἐπιβολή〉 から翻訳されたと考えられる。

しかしながら、〈ἐπιβολή〉という単語は、プラトン、アリストテレスの著作には見られず、少なくとも哲学的表現として確立されたのは、エピクロス派の哲学に由来した、と考えられる。その意味するところは、全認識対象の〈一挙の把握 (ἀθρόα ἐπιβολή)〉である(*6)。これは、部分的な認識と区別される。つまり、部分から部分へと推論をして事柄を把握するのではなく、全体を一挙に把握するのが〈ἐπιβολή〉なのである。そして、ヘレニズム哲学の受容により、古代末には、〈ἐπιβολή〉は〈論証的な思考 (διεξοδικὸς λόγος)〉の対概念として確立された。論証的な思考または認識が、推論的に部分から部分へと事柄を介して、間接的に (mittelbar) 認識するのに対して、直観的認識は、事柄を介さず、

直接的で (unmittelbar) 一挙的な認識である。

ここに、論証的な (diskursiv) 認識の対概念として直観的な (intuitiv) 認識が成立する。このような論証的認識と直観的認識とを明確に区別したのはフィロンであるが^{(*)7}、プロティノスがこれを引き継ぐことになる。ここでは、新プラトン主義者であり、また神秘主義者のプロティノスにおける直観の用いられ方をみることにより、古代において、直観がどのようなものであったのかをしてみることにする。

プロティノスにおいて ἐπιβολή の使用がみられるのは、彼の著『エネアデス』の中である。まず、Lexicon Plotinianum^{(*)8}で 〈ἐπιβολή〉 を引いてみると、‘application (of the mind)’, ‘apprehension’, ‘intuition’ とあり、ここから ἐπιβολή は、何か心の適性、把握、直観という意味で理解されていることがわかる。もともと、ἐπιβολή とは、「～に対して、～に向かって (ἐπι-)、投げ入れること、置くこと」という意味であるのだが、プロティノスはどのように用いているのであろうか。実際のところ、『エネアデス』の中で ἐπιβολή は頻繁に使われているのではないのだが、以下、簡単に見てみることにしよう。

まず ἐπιβολή の日本語訳をみると^{(*)9}、「直観」といういわゆる術語的な用いられ方よりも「見る」あるいは「眺める」という意味で用いられている方が多いようだ。たとえば、Ⅱの8章「視覚 (ΟΡΑΣΕΩΣ) について」という箇所では、「概括的に眺める (ἐπιβολή)」(Ⅱ, 8, 1, 40) と言われている。それ以外にも「集中したまなざし (ἐπιβολαῖς)」(Ⅲ, 7, 1, 4) や「注目のまなざし (ἐπιβολήν)」(Ⅳ, 4, 8, 6) とも言われる。

では一体何を眺めるのであろうか。Ⅲの8章「観想 (ΘΕΩΡΙΑΕ) について」では、「知性の本性を越えているものをどのように把握 [直観] (ἐπιβολή) すればいいのか」(Ⅲ, 8, 9, 19-22) と言われている。

る。また「かのものにむけられた我々のまなざし [直観] (*ἐπιβολῆς*)」(VI, 8, 11, 23), とも言われているように, ここから *ἐπιβολή* は, なにか知性を超えたものを見る, あるいは, 把握するような能力であることがわかる。

さらに, VI の 7 章「イデア群 (*ΙΔΕΩΝ*) の起源について, 善 (*ΤΑΓΑΘΟΥ*) について」では, 「知性は, 一方では直知する能力をもち, それにより自己の内部を眺めるが, 他方で自己のかなたのものを一種の直観 (*ἐπιβολή*) と受容によって眺める (*βλέπω*) 力をもつ」(VI, 7, 35, 19-22) と言われる。ここでは *ἐπιβολή* は, 知性の能力として位置づけられている。

このように, プロティノスにおいて, *ἐπιβολή* は視覚や知性と関連づけられて用いられることが多い。その背景にはプラトンやアリストテレスの知性概念の内実に依るところがあるのであろう。その理解のために, 次に古代における *νοῦς* 概念を概括することにする。

Ⅱ 〈ヌース〉と直観

プロティノスは次の箇所では, *ἐπιβολή* を *νοῦς* の活動 (*νόησις*) や見る (*ὁρᾶν*) 活動と共に用いている。

「…自己自身を直知する時には, すべてを一括して同時に直知する (*νοεῖν*) のである。したがって, そのような人は自己自身への直観 (*ἐπιβολή*) によって, つまり現実の活動において自己自身を見る (*ὁρῶν*) ことによって, 自らのうちにすべてのものを含み持つ。そして, すべてに対する直観知によって, 自己自身をすべてのもののの中に没入させるのである」(IV, 4, 2, 10-14)

この箇所を理解するために, ここで少しプロティノスにおける *νοῦς*

の基本的な概念を見ておこう。*νοῦς* は、プロティノスにとっては、「一者 (*τὸ ἓν*)」から流出 (*emanatio*) した第一のものであり、一者について、もっとも完全で純粋なものである。それは魂よりも純粋なものであり、*νοῦς* の活動は一者にもっとも近い活動であるとされる。このように、*νοῦς* を絶対的に純粋なものへと位置づけた背景には、彼に影響を及ぼしたギリシャ哲学の思想がある。周知のように、プロティノスは新プラトン主義者である。したがって、彼がプラトンの *νοῦς* 概念に影響を受けているのは、言うまでもないだろう。ここでは、プロティノスの思想の背景を理解するために、プラトンの *νοῦς* 概念を見ることにする。

プロティノスがプラトンの作品の中でも、特に好んで読んでいたのは『国家』(*10)であると言われている。その中で、プラトンは認識論を三つの比喩で記している。有名な「太陽の比喩」、「線分の比喩」、「洞窟の比喩」である。「線分の比喩」の箇所では「魂（精神）の内におこる四つの状態」として次のように述べている。

「…四つに切り分けられた線分のそれぞれの部分の上に、魂（精神）の内に起こる次の四つの状態が対応してあると受け取ってくれたまえ。すなわち、一番上の部分には *νόησις* を、二番目の部分には *διάνοια* を、三番目の部分には *πίστις* を、最後の部分には *εἴκασια* を、それぞれ割り当ててくれたまえ…」(『国家』VI, 511E)

藤沢令夫は、*νόησις* には「知性的思惟（直接知）」、*διάνοια* には「悟性的思考（間接知）」、*πίστις* には「確信（直接的知覚）」、*εἴκασια* には「映像知覚（間接的知覚）」という訳をあてている(*11)。ここからプラトンが、直接的または間接的な知性や知覚を魂の中の四つの状態として考えていることがわかる。

さらに プラトンはこの四つの状態を二つにわけると。

「後の二つをあわせて〈思わく〉の状態とよび、前の二つをあわせて

〈知性〉の働きと呼ぼう。〈思わく〉は生成にかかわり、〈知性〉は実在にかかわる」(ibid. VII, 534A)

つまり、知覚(πίστις, εἴκασια)で捉えられる世界と知性(νόησις, διάνοια)で捉えられる世界である。知覚で捉えられる世界を〈可視界〉または〈感覚界〉、知性によって知られる世界を〈可知界〉すなわち〈叡知界〉とする。ちなみに、カントの前批判期の世界観もこのような二世界観である。

周知のとおり、プラトンの真の世界はイデアである。そしてそれは、知性によって認識される世界である。この場合の知性は、間接的な διάνοια(*12)ではなく、魂の一番上に位置づけられた直接知としての νόησις である。イデアとは、もともと「見る(eido)」から派生した名詞で、元来は「見られるもの」という意味である。直接知である νόησις(νόησις)は、イデアを直接見ることによって捉える最上位の認識機能である。したがって νόησις は、イデアを直接に認識するものとして、何ものをも媒介しない純粋な認識であると言える。

プロティノスに話を戻すと、彼は上記のようなプラトンの νόησις 概念をうけつぎ、感覚世界を超越する「一者」から流出した純粋で超感性的な νόησις を想定する(*13)。このような νόησις の認識対象は、先の『エネアデス』の引用によれば、「自己自身」であった。

ところで、νόησις が「自己自身を直知する」という考え方は、アリストテレスにおける「その(神の)思惟は思惟の思惟(ἡ νόησις νόησεως νόησις)」という考え方にみられるものである。アリストテレスは、次のように言う。

「その思惟(νόησις)は自体的な思惟である。〈中略〉その知性(νόησις)はその知性それ自身を思惟する〈中略〉この知性は、これがその思惟対象に接触し、これを思惟している時、すでに自らその思惟対象そのもの

になっているからであり、それゆえ、ここでは思惟するもの ($\nu\omicron\upsilon\varsigma$) とその思惟対象 ($\nu\omicron\eta\tau\acute{o}\nu$) とは同じものである」(『形而上学』XII, 7)

「神の思惟」において、「思惟するもの ($\nu\omicron\upsilon\varsigma$)」と「思惟対象 ($\nu\omicron\eta\tau\acute{o}\nu$)」が全く同一であるところの純粹思惟が想定される。この思惟は、全く純粹なものとして、何の媒介も必要としない直接的なものであり、思惟対象と全面的に接触することから「直観的思惟」とも言われるものである。

このような「神の思惟」に影響をうけ、プロティノスにおいても、神の思惟とは限定しないまでも、純粹な $\nu\omicron\upsilon\varsigma$ の対象は「自己自身」であることが窺える。そして、プラトンやアリストテレスの $\nu\omicron\upsilon\varsigma$ 概念からも明らかなように、 $\nu\omicron\upsilon\varsigma$ とは、何の媒介も必要としない、純粹で直接的なものであることがわかる。

さて、ここでもう一度、先のプロティノスの引用を見てみよう。

「…自己自身を直知する時には、すべてを一括して同時に直知するのである。したがって、そのような人は自己自身への直観によって、つまり現実の活動において自己自身を見ることによって、自らのうちにすべてのものを含み持つ」(IV, 4, 2, 10-14)

ここからも明らかなように、「自己自身を直知する」とは、「自己自身への直観」であり、また、「自己自身を見ること」である。つまり、 $\acute{\epsilon}\pi\iota\beta\omicron\lambda\acute{\eta}$ は、 $\nu\omicron\epsilon\acute{\iota}\nu$ であり、 $\acute{o}\rho\alpha\acute{\nu}$ である。そして、 $\nu\omicron\epsilon\acute{\iota}\nu$ が、何の媒介も必要としない、純粹で直接的な $\nu\omicron\upsilon\varsigma$ の活動であることから、 $\acute{\epsilon}\pi\iota\beta\omicron\lambda\acute{\eta}$ や $\acute{o}\rho\alpha\acute{\nu}$ もそのような活動であることがわかるであろう。つまり、間接的ではなく直接的で純粹な活動なのである。ここから、 $\acute{\epsilon}\pi\iota\beta\omicron\lambda\acute{\eta}$ は、〈直接的に〉見る活動であることが理解されよう。

ところで、この「見る」ということは、アリストテレスにおいては、「観想 ($\theta\epsilon\omega\rho\acute{\iota}\alpha$)」の生活と言われるものであった。見るという行為は、一般的には感覚的なものであるが、アリストテレスは、感覚のうちで最

も好まれるのは「眼で見る」ことであると言う。

「感覚の中でも、最も愛好されるのは、眼によるそれである。だから我々は、ただ単に行為しようとするだけでなく、全く何事を行為しようとしなくても、見ることを他のすべての感覚にまさって選び好むのである」(『形而上学』I, 1)

アリストテレスにおいて、「見ること」は「行うこと」や「作ること」よりも上にあるものとされ、見ること、すなわち、「観想」の生活こそ、最も優れた完全な行為であると考えた。

「知性 (*νοῦς*) が保っていると思われる神的な状態は、その状態を受け容れうる状態 (可能態) というよりも、むしろそれを現に自ら所有している状態 (現実態) である。そしてこの観想 (*θεωρία*) は最も快であり最も善である」(ibid. XII, 7)

アリストテレスはこの観想の生活、すなわち、見る活動を現実態 (*ἐνέργεια*) または完成態 (*ἐντελέχεια*) の活動とし、最も善なものであると述べている。出隆は、このようなアリストテレスの観想について、「見るまたは思惟する活動のように、その現在完了形 (見た) と現在進行形 (見ている) とが同時的であるような活動を、その活動や行為そのことが同時にその終わり (テロス) であり目的であるところの自己完結的・自己充足的な活動または行為」であるという(*14)。このように、見る活動は、それ自体で完結的で、また充足的な行為である故、アリストテレスは、観想を最も優れて完全な行為であり、それは幸福な生活であると考えたのである。

さらに、アリストテレスは、このような最高の活動である「観想 (*θεωρία*)」の活動を「知性 (*νοῦς*)」の活動の中にみいだす。

「この (観想的) 活動は我々の最高の活動である。知性は我々のうちに存する最高のものであるし、知性のかかわるところのものは知識され

るものの最高のものなのだからである。…観想するということは、いかなる行為よりも連続的に行うことの可能なものなのである。〈中略〉知性の活動は、—まさに観想的なるがゆえ—その真剣さにおいてまさっている」(『ニコマコス倫理学』X, 7)

こうして知性の活動は、最高の観想的なものであるといわれる。ここから、プロティノスが「自己自身を直知する」ことを「自己自身を見る」と述べていることが理解されるであろう。「直知する」とは、完全な状態で「見る」ことなのである。そして同時に、これらは「自己自身への直観」と言われる。ここから、「直観」もまた「知性」や「観想」と同様に完全で最高の現実活動であることが示される。

Ⅲ 感性的な対象と直観

以上のようにみてくると、ἐπιβολήは νοῦς と結びつき、超越的なものを把握する最高の現実活動であり、したがってこの最高の活動である ἐπιβολήが、中世の「知的直観」や「神的直観」としての intuitus に受け継がれていくのは十分理解できる。

しかし、プロティノスにおいて、ἐπιβολήは決して νοῦς の作用としてだけ位置づけられているのではない。もともと、ἐπιβολήが「まなざし」であったり、あるいは「眺める」ことであることから理解できるように、αἴσθησις の作用としても位置づけられる。

プロティノスはⅡの4章「二つの質料 (ΥΑΩΝ) について」の中の感覚界の質料について述べた箇所において、次のように言う。

「私は、質料〔素材〕(ὕλη) における無性質をどのように知るのか、… …どのような思考 (διάνοιας) あるいは直観 (ἐπιβολή) によるのだろうか」(Ⅱ, 4, 10, 1 - 3)

ここでは、感覚界の質料でまだ限定されていないものを思考や直観によってどのように把握するのかわかれている。そして、「無限定なものへのまなざし (ἐπιβολή) は無限定である」(Ⅱ, 4, 10, 5) とも言われるのである。このように規定されていないものを直観によって把握するのは、カントの感性的直観にも通じるものであると言えよう(*15)。

さらには、「個別的な感性的なものに注目のまなざしをむける (ἐπιβολήν)」(Ⅳ, 4, 8, 5-6) と言われたり、「直観が感性的なもの (αἴσθητων) との類似を用いる」(Ⅳ, 6, 3, 73-74) という表現からも ἐπιβολήは、感性的な作用として個別的なものや規定されていない質料を把握する作用であることもわかる。

このように ἐπιβολήをみると、それが向けられる対象は、感覚的なものから超感覚的なものまで幅広いことがわかる。そして、νοῦς が直知と訳されるように、直接的で純粋な知であるのと同様に、αἴσθησις も「直接的な知」(Ⅰ, 3, 5, 21) であると言われ、νοῦς も αἴσθησις も共にその特性として直接性を保持しているのである。そして ἐπιβολήは、まさにそれゆえどちらの能力としてでも作用するのである。というのも ἐπιβολήは、「すべてを一括して一挙に (αθροαν) 把握する (ἐπιβολήν)」(Ⅳ, 4, 1, 20) 働きであるからである。ここには、何の媒介や間接的な事柄も介さない〈直接的な〉特性が備わっているのである。つまり、感性的なものであれ、超感性的なものであれ、〈直接に観る〉働きがまさしく「直観」なのであり、それは ἐπιβολήでも同じなのである。

こうして ἐπιβολήの特性も〈直接性〉であり、〈一挙性〉である。そして νοῦς の作用としても αἴσθησις の作用としても用いられることになる。

しかし、この後、ἐπιβολήがボエティウスによって intuitus に翻訳され、中世に広まるにつれ、νοῦς の作用としての直観の方だけが強調されるようになる。νοῦς のラテン語である intellectus と intuitus が一

つになることにより、「知的直観 (intellectualis intuitio)」という術語が成立する。

先にもあげた *Historisches Wörterbuch der Philosophie* によれば、古代においても、5, 6 C 頃、シュリアノスによって「知的直観 (*ἐπιβολαὶς νόεραῖς*)」という語が見られるものの、「知性的な」直観という概念が明確に確立されるのは、古代からの流れを受け継いだ中世において、と押さえておいてよいだろう。と同時に、*ἐπιβολή* が内包していた単に感覚的な対象や事物への「感性的な」直観の意味合いは薄れていくことになる。

もちろん、このような背景には、中世において新たにキリスト教世界観が導入されたことが大いに影響している。たとえば、エリウゲナは、プロティノスの思想に多大な影響を受け、プロティノス的な直観をキリスト教と結びつけて発展させる。また、ニコラウス・クザーヌスも知的直観を神を認識する最も高い段階とし、位置づける。次節では、このような神学と結びついた直観の概念を見ることで、中世における「知的直観」、とくに「神的直観」と呼ばれるものとはどのようなものであるのかを見てみることにしよう。だが、紙幅の関係上、中世をすべて網羅することはできないので、ここでは近代の解釈者達の解釈を中心に簡単に概観することにする。

IV 神を直視する直観

まず始めに、聖書の中のパウロの次の一節に注目してみよう。

「今われらは鏡をもて見るごとく見るところおぼろなり。されど、かの時には顔をあわせて相見ん。今わが知るところを全からず。されど、かの時にはわれが知られたる如く全く知るべし」(「コリント人への第一の

手紙」13；12) (*16)

この箇所は、パウロが知と信仰を区別した箇所として有名な箇所である。と同時に、この箇所は、「見る」または「知る」というものに二つの様態があることを示している箇所でもある。

まず、「“今”の私たちは鏡に映ったおぼろなるものを見る」とは、現在は、直接見ることのできないものを間接的に、あるいは、推論的におぼろげに見ているにすぎないという意味であろう。それに対して「“かの時”には、顔と顔をあわせて見る」とは、かの時、すなわち、いずれ天国へいったあとには、直面して直接に（神を）見ることができるようになるということを示していると言えよう。

パースは、アンセルムスがパウロのこの言葉をうけ、知識について次のような区別をしたということを、的確に述べている(*17)。

「アンセルムスは、神についての我々の知識と、有限的事物についての我々の知識を区別し、聖パウロの言った言葉、*Videmus nunc per speculum in aenigmate ; tunc autem facie ad faciem* を考えながら、前者を思惟 (speculation)、後者を直観 (intuition) と呼んだ」(P193)

パースの解釈から、直面して (*facie ad facie*)、直接見ることが、「直観」と呼ばれていることがわかる。*ἐπιβολή*の根本的な活動が「見る」ことであつたように、ここでも面と向かって「見る (観る)」ことが「直観」である。しかも、神を見ることを「直観 (intuition)」と呼んでいることがわかる。

プロティノスにおいては、感覚的な事物から超越的なものに対して *ἐπιβολή* が用いられていたが、ここでは、神という超越的なものに限定する認識が「直観」と呼ばれているのである。このように、この時代、超越的なものを、「思惟」ではなく「直観」において捉えることを「知的直観」、または「神的直観」と呼んでいた。

ニコラウス・クザーヌスは、『知ある無知(De docta ignorantia)』(*18)において「無限者と有限者との間に比例(proportio)関係は成立しない」(I, 3)と言い、知的直観について次のように述べている。

「我々は、絶対的最大の者が無限であり、何ものとも対立せず、かつ最小者と一致することを、一切の理性的議論を越えて、比量的には捉えられない仕方で見るのである」(I, 4)

ここからも明らかなように、絶対者または無限者と我々有限者の間は「比」による関係ではない、と言われている。クザーヌスによれば、絶対的最大の者が最小者と一致するとは、「反対の一致(coincidentia oppositorum)」であると言われる。この「反対の一致」は理性を越えたものであり、知的直観を意味しているものと解釈される。そして、この知的直観によって、神を見る(捉える)のである。

このようなクザーヌスの立場について、カッシーラはその著『個と宇宙(Individuum und Kosmos)』(*19)の中で、クザーヌスにおいて「無限的・神的な存在は単なる概念による論証的(diskursiv)認識から遠ざかる」(P14)ものと述べている。以下、カッシーラの解釈に基づきながら、クザーヌスの知的直観をみていこう。

「このもの[無限的なもの]を把握する真の機関は、知的直観(intellektuelle Schau)すなわち知的直視(visio intellectualis)であり、そこではあらゆる種類の論理的な対立は揚棄される。なぜなら、我々はこの直観にあって、経験的な存在区別とそれらの単なる概念的分割をすべて越えて、存在の純一なる起源へ、あらゆる分割と対立の以前である一点へと我々自身に移し置かれるのを見るからである」(ibid.)

無限的または神的な存在を把握するのは、論証的な認識ではなく、知性的な直観、しかも、直視であると言われる。そして、その直観(直視)においては、対立は揚棄され、純粹な一つのものへ包含される、とカッ

シーラは述べている。

さらにカッシーラは、クザーヌスの『神の直視 (De visione Dei)』という著作において、クザーヌスの直観が「最も明瞭に規定されている」(ibid. P32) として、直観 (直視) について次のように言う。

「どの特殊な、個別的なものも直接的な (unmittelbar) 神への関係をもち、神に対して、いわば眼と眼で対面しあう。しかし、神的なものの真の意味が開示されるのは、〈中略〉これらの関係の全体を一つの直視 (Schau) の、つまり、一つの知的直視 (visio intellectualis) の統一へ至る時である」(ibid. P33)

いかなるものも、神との〈直接的〉な関係をもち、また、神と直接的に対面する。だが、本来神的なものが開示される時とは、知的直視の統一へと至る時、すなわち、神と自己の同一となる時に真の意味となりうるのである。

つまり、ここでの「知的直視」とは、単に神と直面し、それをただ捉えるだけではなく、神の中へと包含され、神と合一するようなものとして、直視が捉えられているのである。そのような知的直視においては、「神のうちに自己を見、しかし同時に自己のうちにのみ神を見ることができる」(ibid.) ようなものなのである。

さらに、カッシーラは、このような知的直視を「精神の自己運動を前提し、精神自体に存する根源的な力と持続的思考作業における展開とを前提とする」(ibid. P15) ものとして解釈している。

この解釈にしたがえば、クザーヌスにおける直観 (直視) は、人間が神への直接的関係をもつだけでなく、神の下へ自らを置き、そこで合一するような精神的な活動なのである。直観 (直視) は精神の自己運動として、神を捉えるような知的直観であるとともに、神と合一し融合するような神的直観として捉えられることになる。

このように中世、とくにキリスト教神秘主義と結びついた神的直観をみると、それは、神と直接的な関係を結ぶものとして、はたまた、神と合一し、一体化してしまうような直観なのである。だが、ここでも直観の根本定義は、直接性、あるいは、直面して見るものであった。

もちろん、このような神秘的な能力としての直観は、近世に近づくにつれて、あるいは「信仰」と「知識」の対立が明確になるにつれ、直観の位置づけや役割もまた変容をしていくことになる。だが、直観の役割は異なるものの、どの時代においても直観の特性は「直接性」であるという点だけは確認できるだろう。

〈まとめ〉

以上みてきたように「直観」とは、それぞれの時代や哲学者において用いられ方は異なるものの、その内実は〈直接性〉という性格が決定的に重要なのである。この論点は、今後の近世・現代の直観問題を考察する際に、常に念頭におかれないといけない視点である。

拙論では、この点をプロティノスのἐπιβολήや中世の神的直観を見ることで確認をしてきた。このようにみてくるとカントの「感性的直観」も直観の特性としての〈直接性〉が保持されていれば、必ずしも伝統破壊とはいえないのである(*20)。

だが、中世以降、「知的直観」が確立され、近世にもその流れが受け継がれる中で、カントにおいて「直観」は、我々には決して知的直観はもたないものとして、「感性的直観」だけを示すのである。しかし、カントのこのような思想は、『純粹理性批判』において明確にされるのであって、前批判期、批判期後期において、知的直観への憧憬がみられるのも興味深い。カントの思索において、感性的直観と知的直観はどの

ような関係にあるのか、また、トマスから近世においては、直観はどのように受容され、カントの思索にどう影響を与えたのか、という課題は、今後の課題として、ひとまず本論を閉じることにする。

【註】

Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, 1781/87.

P. V. Plotin, *Enneades*. I–VI, ed. E. Brehier, 1963.

Plotinus, *The ethical treatises*, vol.1–5, by S. Mackenna, London, 1917.

邦訳：『プロティノス全集』全四巻，中央公論社，1986.

なお，翻訳にあたっては，全集の日本語訳を大いに参考にさせていただいた。

* 1 以下，日本語における「チョッカン」の成立は，次のものを参照。

『大辞典』17巻，平凡社，1935．および『明治のことば辞典』惣郷正明，飛田良文編，東京堂出版，1986．

* 2 明治45年刊の『哲学字彙』では，intuition は「直覚」，*Anschauung* は「直観，観相，直覚」とあり，「直観」はドイツ哲学から一般化したものか，と考えられている。

* 3 「直観」とは文字通り〈直接観る〉ことであるが，この「観る」は，単に「見る」のではない。『大辞典』によれば，「観」には観るや眺める，見方という意味の他に，サンスクリットの *Viparyana*, *Vidarsana* という語の訳でもあり，次のように記している。「止に対して，安定にありて智慧を以て対境を細やかに識別するをいふ。即ち智の別名」とある。ここから「観」が「智」の意味を含意したものであることがわかる。

* 4 J. G. Herder, *Vernunft und Sprache. Eine Metakritik zur Kritik der*

reinen Verunft, 1799.

- * 5 Historisches Wörterbuch der Philosophie, hrsg. v. J. Ritter, 1971.の Th. Kobusch による Intuition の項目, および, Enzyklopädie Philosophie, hrsg. v. H. J. Sandkuhler, Hamburg, 1999.の El. Stroker の Intuition の項目をそれぞれ参照。
- * 6 エピクロスは彼の著『基準論』の中で, 感覚と先取観念(プロレープシス)と感情とが真理の基準であると述べている。彼にとって, 感覚は推論を含まないもので, 真偽を区別する基準なのである。またこれをうけて, エピクロス派が先取観念と呼ぶものは, 一種の直接的把握(カタレープシス)である。ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシャ哲学者列伝』(下)(加来彰俊訳), 岩波文庫, 1994. の第十卷エピクロスの章を参照。
- * 7 Vgl. Historisches Wörterbuch der Philosophie, hrsg. v. J. Ritter, 1971. Intuition および Anschauung の項目
- * 8 J. H. Sleeman, G. Pollet, Lexicon Plotinianum, Leiden, 1980.
- * 9 『プロティノス全集』別巻, 中央公論社, 1988. の索引, ἐπιβολήを参照。
- * 10 Platonis Opera, by I. Burnet Oxford University Press, 1969.
『国家』長沢信壽訳, 東海大学出版会, 1971. 『国家』藤沢令夫訳, 岩波文庫, 1979.
- * 11 前掲書の藤沢の訳による。なお, 藤沢によれば, そもそもプラトンにおいて, これらの用語が必ずしも厳格な術語的用語として一義的に固定されているわけではない, と言われているが, 一応ここでは藤沢の訳の意味に従うことにする。
- * 12 διάνοια は, 「悟性的思考(間接知)」ともあるように, 何か諸前提を出発する概念的思考であり, プラトンによれば, 「思わくよりは明瞭で, 知性よりは不明瞭なもの」(『国家』Ⅶ 533D) とある。

- *13 プロティノスにおいて、このような *νοῦς* は、魂よりも上に位置づけられることになる。なぜなら、魂は我々の身体に宿るものなので、知性界においても、魂はいわば知性界の末端に横たわっていて、感性界と関わりを持つことになるのだが、超越している *νοῦς* が直接に感性界と関わりをもつことはないからなのである。
- *14 『形而上学』出隆訳，岩波文庫，1959. の訳者註（下巻 P257）を参照させていただいた。
- *15 カントは新プラトン主義の思想をよく読んでいたということもあり，カントの思想とプロティノスの思想の類似性や差異については今後考察を深めていきたい。
- *16 「聖書」日本聖書協会，1971.
- *17 Ch. S. Peirce, Questions Concerning Certain Faculties Claimed for Man, 1868. / A Chronological Edition, vol.2, Indiana U.p., 1984
 なお，パースの直観概念の理解および直観批判についての詳しい考察は，黒崎政男『カオス系の暗礁めぐる哲学の魚』，NTT 出版，1997. を参照のこと。
- *18 N. Cusanus, DE DOCTA IGNORANTIA, ediderunt E. Hoffman et R. Klibansky, Lipsiae, XXXII, 1932.
 『知ある無知』 岩崎允胤＋大出哲訳，創文社，1966. 『学識ある無知』山田桂三訳，平凡社ライブラリー，1994.
- *19 E. Cassirer, Individuum und Kosmos in der Philosophie der Renaissance, 1927. / Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1977.
- *20 カントにおける「直観」についての考察は，拙稿「カントの〈直観〉と〈象徴〉をめぐる一考察」（『哲学』日本哲学会編，第54号，2003. 所収）にて論じた。